



6つの物語でたどる ビッグバンから地球外生命まで 現代天文学の到達点を語る

マシュー・マルカン, ベンジャミン・ザッカーマン編
岡村定矩訳

日本評論社 A5判 352頁 定価 2,500円+税

解説書
お薦め度
4
☆☆☆☆★

1995年にカリフォルニア大学が主催したシンポジウムの内容をまとめた本から始まり、天文学の予想以上の発展を受けて大改訂した第2版(“Origin and Evolution of the Universe—From Big Bang to Exobiology” Second edition)の日本語版です。シンポジウムが実施された1995年3月という時期は、まだ最初の太陽型星まわりの系外惑星が発見される前ですが、それ以降、天文学は凄まじい発展をしています。系外惑星だけでなく、原始惑星系円盤の直接撮像やブラックホールシャドウの検出、重力波の検出、昨年末に打ち上げられたJWSTについても触れられ、改訂版というより最新の天文学全般を網羅した本という印象です。

ビッグバン・銀河進化・化学進化・超新星・星形成そして宇宙における生命について、章別に異なる研究者による個性的な語り口をなるべくそのままに書かれています。読んでいても、この方の講演を聞いてみたいという気持ちにさせるものでした(「天文学者である私たちは完璧主義者なので…」(第3章より)はウィットに富んだジョークだと思いますが、天文学者みんなが「完璧主義」と誤解されないかちょっと心配ではあります…)。宇宙の始まりから生命までの概観が一気に描かれているので、読み終わると長い旅を終えたかのような感覚になりました。

天文学の広範にわたる内容を一般の方向けに書いてあるとはいえ、その内容の奥行きは(当然ですが)かなり深く、きちんと理解しようとする

かなり難しい内容までを含んでいます。その点をフォローするように訳注が多く入っていて、理解する助けになっています。時折、英語特有の表現の訳注がある点も興味深いです。さらに、用語集や参考文献も豊富に掲載されているため、それぞれの研究が天文学のどこに位置しているかを認識しつつ、学生がゼミなどで深掘りしていくのもよいかもしれません。また、昔通り天文学について勉強した人が、今の天文学の現状や、今まさに研究が進んでいる分野を知りたい人にもおすすめです。また、超新星として有名なSN1987Aが発見されたエピソードなど、他分野のちょっとしたエピソードなども楽しいものでした。個人的にも、もう一回読み直して他の専門分野の復習をしたいと思うところです。

最後の「宇宙における生命の起源と進化」では、これまでの天文学の一般書より、生物について生化学的な側面がしっかり書かれている印象でした。一般向けの書籍として、天文学の文脈で自然な流れでここまで記載されているのを見ると、系外惑星の発見に伴い、アストロバイオロジーの分野が天文学のただのエピローグではなく、天文学の中の一分野になってきていると感じます。生命についてはもちろんですが、それぞれの分野でまだわからないこと、研究が今まさに進んでいるところもそれぞれの章の最後に触れているので、天文学のどの分野に進もうか考えている人にとっても手助けになる1冊だと思います。

日下部展彦(アストロバイオロジーセンター)